

草の根型協力を考える ～国際耕種のアプローチ

第2回：ジンバブエにおける現地 NGO との連携

ジンバブエにおける現地 NGO との連携についてはこれまで AAINews でも何回か紹介しているが(第 28,29,36 号)、これまでの AAI と ZWP(Zvishavane Water Project)との連携の試みは以下のようにまとめることができる。

- 1) 人的交流(AAI スタッフ派遣による ZWP の活動状況調査及び連携可能性調査)
- 2) 資金援助(小規模ダム補修支援、ZWP 事務所新設補助)
- 3) 技術的アドバイス(グループ・ガーデンでの野菜栽培指導)
- 4) 共同プロジェクト実施のためのプロポーザル作成(外務省・草の根無償資金協力、JICA 開発福祉支援事業)

ここで NGO というアプローチについて改めて考えてみる。途上国における開発援助に携わっていると、「誰のための援助か」という疑問がわいてくることもある。そしてそこから、「裨益者」であるべき人たちに直接アプローチできる手法を取りたいという思い、あるいはそういうプロジェクトの必要性や目的が生じてくる。また国際協力の「流れ」の中でも、ODA による NGO の支援や NGO との連携の試みが多く見られる。これまでも NGO 事業補助金、草の根無償、各種助成財団等々、NGO を支援するさまざまな仕組みがある。さらに最近、JICA 関連では開発福祉支援事業、開発パートナー事業等、内外の NGO 等を直接の支援対象あるいは援助プロジェクトのパートナーとするようなスキームもできた。しかし、「草の根型協力」というのも一つの手法であり、重要なことは持続的であること、住民側の主体性(オーナーシップ)があること、自立的であることあるいは自立をめざしたものであること、である。そして、「裨益者」に近いところからプロジェクトが始まることやボトムアップであることは、それが持続的であることや住民が主体的に関わることは必ずしもイコールではない。

住民側にオーナーシップを醸成するためには、ドナー側の都合やタイムテーブルを優先して拙速に行うのではなく、時間をかけてじっくり進めることが必要であり、これが NGO との連携を考える場合の一つの重要なポイントである。ZWP の場合、新たな活動内容や場所で一つのプロジェクトを始める際に、対象住民との対話や現状把握のための事前調査を十分に行い、それらを通して住民側からやる気を起こさせるようにしている。特にグループ・ガーデンはすでに 20 数カ所で実施されているが、住民の強い意志や要望のある地域を選んで行われている。また ZWP と地域住民の関係は、一方が他方に依存するのではなく、お互いに対等の関係を保つことをめざしている。例えばダム建設の場合、資材のセメントや一輪車、シャベル等は ZWP が準備するが、建設工事は住民の労働によって行われる。

「持続性」を NGO 側から考える場合には「組織の力」が重要である。理念や情熱だけでなく、確かな技術と継続するための工夫(資金力、組織力、人材等)や戦略が必要である。ZWP の活動予算を見ると活動資金は今のところ自己収入はなく、ドナーからの資金援助のみである。ただ現在進行中の活動に必要な資金は既に確保されており、現行スタッフ数ではそれらの活動プログラムを実施することで手一杯である。したがって、今後 ZWP と連携していくにあたって、全く新規のプロジェクトを実施するには新たなスタッフの確保が必要となる場合もある。一方、グループ・ガーデンにおける野菜栽培プロジェクトを見ていると、ZWP 側には栽培技術面の指導を行える人材がおらず、現行ドナーも技術指導は行っていないので、こうした技術力という点からも支援の必要性がある。したがって、AAI と ZWP の今後の連携を考えていく上で、全く新規のプロジェクトを立ち上げるよりは既存のプログラムに相乗りする形で、例えばグループ・ガーデンにおける野菜栽培技術の改善等のアプローチが現実的かつ有効であると思われる。



小規模ダムの補修工事現場



対象住民との対話



グループ・ガーデン用の井戸